長谷川博之の「圧倒的実践日誌」1

埼玉県中学校教諭　長谷川博之　著

トークラインBOOK
教育技術研究所

※本書は『教育トークライン』（教育技術研究所）二〇一八年四月号～二〇二二年三月号に掲載された連載を、カテゴリーごとに章分けしてまとめたものです。

目次

第1章　子供の変容

学習の苦手な生徒を最も活躍させる……8
向山型研修大会運営法……11
向山型国語で授業びらき……14
人間教育で土台を作ろう……17
無謀なチャレンジに笑顔で臨む……20
事実が人を強くする……23
成果は若手に譲ればよい……26
『生徒の心をわしづかみ！
長谷川博之の「学級通信」365日全記録上巻』（学芸みらい社）発刊……29
理想を現実化する……32
価値ある活動で忙しくさせよう……35

部活動経営＝学級経営……38
討論で言語運用能力を鍛える……41
中学二年「走れメロス」指名なし討論……44
向山型国語で大人顔負けの討論を展開する中学生の事実……47
相手を変えるより、まずは関係性を向上させよう……50
全力を出し切ればこそ得るものがある……53
教師たる自身の存在意義はここにある……56
新たなる戦いに挑む……59
レッテルを貼って言い訳するな……62
学級とは君自身である……65
子供の事実が支えである……68

第2章　学校改革

偽りなき授業時数確保の取り組み……72

目次

旧弊を打破するために戦おう……75
生徒・選手の伸びを加速させる……78
子供の不利益と戦う……81
部活動批判に抜け落ちている視点……84
新たな教育文化を創造する……87
ただ生徒の利益のためだけに働く……90
仕事の範囲は自ら決める……93
自らの見栄のために子供を犠牲にする教師たちに告ぐ……96
ＴＯＳＳ型部活動指導を構築する……99
「操作」が見えたら「自治」ではない……102
理不尽な慣習に物申す……105
専用「国語教室」始動……108
授業で行う学校づくり……111

第3章　ＴＯＳＳの流儀

ＴＯＳＳの流儀……116
中学教師千名のネットワークを構築する営み……119
委嘱研究発表会にＴＯＳＳの主張をビルトインする……122
一面のみの「事実」に潜む不備不足……125
色あせないどころか更に輝きを増す「向山洋一映像全集」（教育技術研究所）……128
時に現場を飛び出すことも必要だ……131
急激に変化しつつある不登校関連政策にキャッチアップしよう……134
令和版「プロ教師の条件」思考中……137
実践に純粋であれ……140
形式主義を疑え……143
新たに創出される「休日」に教師修業をする文化を……146
異動は最大の研修である……149
ＴＯＳＳ外からも必要とされる実践を積み上げる……152
あとがき……155

第1章　子供の変容

学習の苦手な生徒を最も活躍させる

学習に嫌悪感すら抱いている中学生たちを相手に、彼らの可能性を引っ張り出す授業を日々展開している。
継続の末に、毎年、揺るぎない事実が生まれる。

2018.5

某年某学校での実践である。
「先生、勉強を教えてください」
週明けの朝、児童養護施設で生活するA子が突然声を掛けてきた。
自学で、更に突っ込んだ国語学習がしたいのだという。
施設の子供たちは過酷な生育歴を背負っている。
彼らが通ってくる学校に勤務すれば分かる。教師の想像を超えた人生を歩んでいる

子供ばかりなのだ。生きていてくれてありがとう。その一言しか言葉にならないような、そんな子供もいる。

A子も例外でなく、様々なことに批判の目を向け、学年職員をはじめ大半の教師とぶつかる女子だった。

学年も学級ももたない私は、授業で勝負していった。

ひと月で、目つきが優しくなった。

九月には、討論でぽつぽつと発言し始めた。

十一月の実力テストで、得点をぐんと伸ばした。

十二月、「志望校を変えました」と報告に来た。

三学期には討論の主役を張った。彼女の存在は、その学級の授業になくてはならないものとなった。

私立入試の中心日に、彼女は学校に残留した。

施設の子供で私立を受験する子は、毎年皆無であった。

各学級、ほとんどの生徒が受験に行っている状況だ。
残留生徒を全部集め、「参観したい」という同僚も子役にして、まとめて授業をした。文学的文章と説明的文章の読解である。
これが大いに盛り上がった。学級の枠を取り払っての新鮮な授業である上に、答えの検討で質の高い発言が続いたのだった。
他学級の子供や同僚たちは、A子の取り組みのすばらしさに度肝を抜かれていた。彼女の変容ぶりは、彼らの想定の上の上を行っていたのだ。
翌日、A子の学級の授業で、それを伝えた。顔を赤らめて、「でも、もっと頑張ります」と宣言した。小さなどよめきが起きた。これが人間の可能性なのだと、私もまた胸が熱くなった。

向山型研修大会運営法

練習試合の数倍の経験値を積み得る研修大会を向山型で運営すると、子供も大人も幸せになる。

2018.6

中高教師の宿命である部活動指導。

某年十二月。二十三日に公式戦を終え、二十五日にソフトテニスの研修大会を主催した。研修大会の運営は負荷の高い仕事である。それでもするのは自チームのみならず、県の競技レベルの向上に資したいからである。

今回は八校八十ペアを招いた。どこも実績のある学校である。

運営委員長として、前日までの準備と当日の運営に取り組んだ。必然的に生徒は運

営メンバーとなる。彼らは早朝から夕方まで、自分たちの試合がありながら、様々な仕事に走り回ることとなった。

私はずっと本部にいて、試合の組合せやコート割等の管理をしていた。ゆえにベンチコーチには一度も入れなかった。日頃から自分の頭で考えさせているから、監督不在でも生徒は動じない。

二十三日の大会で唯一勝利できなかった一年生ペアも、記念すべき一勝を挙げた。のみならず、あと二点で二回戦突破というところまでいった。二年生一番手がベスト4に残り、二年生二番手と一年生二番手がベスト8に残った。結果として、上位八ペア中四、五、六位であった。

研修大会の運営も、「向山型」でやる。例えば、空白禁止である。八十ペアが集うトーナメント戦。通常ならば、負ければ終わり。一回戦でシード選手と当たって瞬時に敗れた選手は、そこから九時間あまり応援のみとなる。

そういうのが、好きではない。そこで、一回戦負けの四十ペア用に別のトーナメン

トを作り、「優勝」まで取り組ませた。
のみならず、二回戦負けの二十ペア用にも第三のトーナメントを作り、「優勝」まで取り組ませた。
のみならず、三回戦負けの選手用に新たにコートを借り受け、オープン対戦を勧めた。
誰に教わったわけでもない。選手のために何が良いかを考えれば、答えは出る。
このチャレンジが極めて好評だった。閉会式で司会を終えると、各校の選手が次々と駆け寄ってきた。
「感動しました！　ありがとうございました！」
「二時間掛けて来て、本当に勉強になりました！」
「ぜひ第二回も開いてください！」
その後、監督陣からも。
彼らの喜びが、私の喜びとなる。

向山型国語で授業びらき

アセスメント※を積み重ねつつ、まずは全体を整え、しかる後に個別の支援を展開していく。
逆転現象を起こすことが肝である。

2018.7

国語の授業びらきで私がなすことは、教務主任となり、学年所属がなくなっても変わらない。「教材の使い方の指導」「発表の仕方の指導」「忘れ物の指導」「ノート指導」「メモの指導」などを教え、活動させ、褒めて定着させる。一週間で全体を安定させる。

全体対応では、まず、筆記用具を統一する。B・2Bの鉛筆、赤鉛筆、下敷、ミニ定規である。次に、授業はTOSSノートで統一する。優れた教材も採用する。効果

の上がる指導を挙げる。

①「あかねこ漢字スキル」を用いた漢字指導

②「暗唱詩文集」を用いた暗唱指導

③「あかねこ名文視写スキル」を用いた視写学習

④「あかねこ読解スキル」を用いた短文読解指導

作業内容と手順とがはっきりしていて、混乱が生じない。学び方が身に付く。短時間で達成感を得られる。

向山実践ほかを追試する。既習教材ゆえ生徒は高をくくっている。そこに「あれども見えず」を問うものだから、予想の外れた生徒は驚き、熱中する。知的な授業を通し、「これこそ国語の授業だ」と実感させることができる。

⑥「五色百人一首」／「五色名句百選かるた」

男女問わず、文句なしで熱中する。初年度は「五色名句百選かるた」がよい。

学習環境を整えてから、具体的な指導に入る。「全体、しかる後に個」の原則であ

る。全体を安定させた後、引き継ぎ資料で評定が「1」と「2」の生徒を授業に巻き込むことに力を注ぐ。成功体験を積ませるだけでは足りない。必要なのは、逆転現象である。思い込みを引っくり返すのだ。そのための支援は主として、彼らの認知特性に沿った発問、指示、全体・個別対応で行う。赤鉛筆指導もこの個別対応に入る。

一年間国語を担当すると、翌年四月のＮＲＴでは評定「1」が減る。ある年は十二名から三名へ。またある年は九名から一名へ。「1」が「2」となり、「2」が「3」となる。「飛び級」する生徒もいる。そして二年後、「1」はゼロとなり、「2」もほぼゼロとなり、「4」が最も多くなる。分布図の山が右（5）方向に大きく動くのだ。できない理由は人それぞれだ。だからこそ大量の「引き出し」が、教える側には必要だ。向山型国語には、それがある。

※　個人の状態像（自覚症状や表情、言動からの判断）を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べたりすること。